【講演】

「左右の」大臣考―テクストとの向き合い方―

中井賢一

本稿は、平成二十七年七月十一日に開催された「熊本県立大学日本語日本文学会」例会における講演記録である。本会参加者の多くは本学の学生や教職員であるが、他大学の学生や教職員、一般の方の聴講も一部見られる。

当日の配布資料、及びスライド提示資料は、一括して本稿の最後に掲げた。なお、スライド資料の影印画像は、源氏物語大島本が『大島本源氏物語』（角川学芸出版）、大澤本源氏物語が『幻の写本・大澤本源氏物語』（宇治市源氏物語ミュージアム）、九州大学蔵本うつほ物語が『宇津保物語（細井貞雄書入本）』デジタル画像（九州大学付属図書館九大コレクション）に、それぞれ依っている。

文学部日本語日本文学科の中井です。主に平安期の物語について研究しています。ここ数年は、物語内部の政治力学や権力構造に興味を持っておりまして、本日もそのような観点から、お話をさせていただくことになると思います。配布資料は片面印刷のレジュメが二枚4ページです。

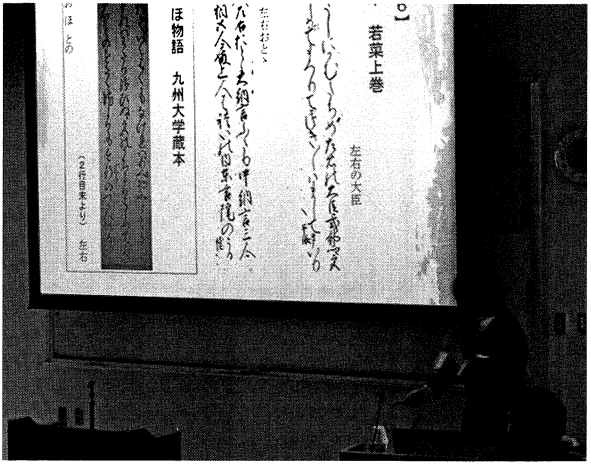
講演に先立ちまして、本日多く用いる「テクスト」という用語について定義しておきます。もともと「テクスト」というのは、糸で編んだ織物のように、言葉が集まった状態のことです。衣服のことを「テキスタイル」と呼びますが、同じ語源です。そこで、本日は「テクスト」イコール「私たちが研究対象とする文字の集合体」とします。例えば、文学研究の立場なら、活字本の「本文」、正しくは「ほんもん」と呼ぶべきですが、聞き取りづらいと思いますので「ほんぶん」と言います。あるいは、それら活字本の元となった「底本」、「そこほん」ですね、すなわち自筆の原稿や写本の本文のことです。語学や教育学の立場なら、文

字だけでなく、音声やアンケートや数値などのデータを扱うこともあると思いますが、これらも広い意味での「テクスト」としましょう。つまり、文学・語学を問わず、時代を問わず、文字言語・音声言語を問わず、皆さんが研究対象とする文字や言葉などの集まり、それが「テクスト」である…。

では、ここで皆さんに問いたいと思います。皆さんは、なぜそのテクストを使っているのでしょうか。例えば、有名な作家や作品なら、様々な出版社から活字テクストが出ています。写本でも、「孤本」でない限り、いくつも種類がありますし、データベースもアンケートも、もっと違う母集団のものがあるはずです。

たまたま手近にあった。先生に紹介された。あるいは一番安かった。様々な理由があると思いますが、果たして、本当にそのテクストで大丈夫ですか。

本講演におきましては、「『左右の』大臣考―テクストとの向き合い方―」と題しまして、テクストをいかに捉えるべきか、ささやかな提案をしたいと思います。私は、平安文学の立場ですので、源氏物語の写本を中心に説明を進めますが、最後のまとめは、研究ジャンルを問わず、皆さん全体に関わるところに着地する予定です。



ではまず【資料1】をご覧下さい。源氏物語の写本を、と言ったところですが、その前に、少し狭衣物語を見ておきたいと思います。と言いますのも、狭衣物語は、写本相互の異文の多さ、すなわち表現のズレが大きく、示唆に富むからです。今回は有名な「天稚御子降下事件」を取り上げてみました。

主人公狭衣が、ある時、帝に笛を演奏させられます。すると、そのすばらしさに感激した天人「天稚御子」が降りてきて、狭衣を天上界に連れて行こうとします。ABは共にその直後の場面です。現代語訳を後ろに付けてあります。いろいろな傍線が、少し目にうるさいですが、同じ種類同士が対応しています。では順に見ていきます。

まず、Aですが、春夏秋冬四冊本と言いまして、現在筑波大学にある写本です。この本は新潮日本古典集成の底本「そこほん」となっておりますので、本文の引用はそれに拠りました。まず一重傍線部、「かうめでたき天稚御子の御有様の引き離れがたうて、狭衣は笛を吹く吹くさそわれぬべき気色なるに」。狭衣が天稚御子と共に天上界に行きそうになります。すると点線部、「帝の御心騒がせたまひて、…いといみじき御気色にてひきとどめさせたま」う、と帝が必死に引き留めます。すると狭衣は、波線部、「帝の袖をひかへて惜しみ悲しみたまふ、親たちのかつ見るをだに飽かず後ろめたうおぼしたるを」、「このたびの御供に参るまじきよしを、言ひ知らず悲しくおもしろく文作りて」とあるとおり、まず帝が悲しむこと、次に親が心配なことを思って、結果、天稚御子の御供はできないと漢詩にします。つまり、Aの狭衣は、帝たちの悲しみを慮って、自ら天上界行きを中止したわけです。

ではBはどうでしょうか。小学館新全集の「そこほん」になっている内閣文庫蔵深川本です。一重傍線部、狭衣が天稚御子と天上界に行きそうになること、点線部、それを帝たちが引き留めること、ここまではAとほぼ同じです。しかし波線部、「この御子もいと心苦しうおぼしわづらひたるけしきにて」、「(天稚御子は) えひたすらに今宵率て昇らずなりぬるよし、おもしろうめでたう文に作りたま」う、となっていて、Bでは天稚御子が、帝たちを心苦しく思って、狭衣を連れて行くのを止めると漢詩にしています。帝に配慮するのは、天稚御子であり、狭衣ではありません。そればかりか、BにはAにはない狭衣の様子も描かれます。二重傍線部、「中将はうち泣きて、心よりほかに口惜しう、かかるほだしどもにひかへられたてまつりて、今宵御供に参らずになりぬる」。ここはレジュメ下段の《訳》も読んでみます。二重傍線部のところをご覧下さい。「狭衣中将も涙をこぼして、心外で悔しく、このような帝たちとのほだしなどに引き留められ申し上げて、今宵天稚御子とともに天上に参上できなくなった」。狭衣は帝とのほだし、ご縁のせいで天上に行けなくなったと悔しがっています。つまり、Bの狭衣は、天上界行きを優先して、帝たちを顧みない人物なわけです。

つまり、Aでは、帝の引き留めに自ら応じる、すなわち

帝の意向を重んじるのに対し、Bでは、帝の引き留めに応じないばかりか、天上界に行けない原因となった帝を批判する、すなわち帝を軽んじる。まさに対照的です。実は、狭衣は、最終的に帝になるのですが、そうすると、狭衣が、そもそも帝の存在を重んじる人物か、軽んじる人物かによって、物語全体の意味もずいぶん変わってくるように思います。狭衣は元々源氏、つまり皇位継承権を剥奪された皇子です。Bだと、その狭衣が、時の帝を批判し、軽んじつつ、帝に取って代わることになるわけです。だとすると、クーデターと言いましょうか、復讐と言いましょうか、今の帝を否定するがゆえに打ち倒したみたいな、いきなりドロドロとした不穏なイメージになってしまいます。つまり、テクストのズレが、ストーリー全体を、あたかも別の物語のごとく、変えてしまうことがあるのです。

では、源氏物語に戻りましょう。**【資料2】**にお移り下さい。実は源氏は、狭衣に比べるとテクストのズレはかなりましです。もちろん、写本が多いぶん異文も多いですが、あれほどの長篇にもかかわらず、今の狭衣みたいに人物像やストーリーが激変することはありません。この辺り、私の文学史の授業で述べた「源氏のイデオロギー化」と関わると思いますが、とにかく遙かにテクストのズレが小さいわけです。

ところが、近年、その常識をくつがえす出来事がありました。二〇〇八年、大澤本（おおさわ）の発見です。正確には「発見」ではなく、既に池田亀鑑氏が調査もしていたのですが、なぜかその後、行方不明になっていました。それが、二〇〇五年、当時大阪大学を退官されたばかりの伊井春樹先生に調査依頼が入り、二〇〇八年の源氏ミレニアムに合わせて公表されたのです。現在は、京都宇治の源氏物語ミュージアムに所蔵されていますが、当時、この大澤本の異文を巡って、学会に、まさに激震が走りました。花宴巻といいまして、光源氏と朧月夜の恋を語る巻があります。左大臣方に所属する光源氏が、敵方、右大臣の娘、朧月夜と通じてしまう。その後も通っているうちに遂に右大臣に見つかり、須磨に流れることになります。いわば、この恋は光源氏の運命を左右する重要な恋なわけです。さて、**【資料2】**ですが、光源氏が、まだ名前も知らない朧月夜にもう一度逢いたいと思って右大臣邸に侵入し、漸くそれらしい女君を見つけます。そして、和歌を詠み掛けた、その直後から巻末にかけての叙述です。Cは大島本の翻刻です。大島本というのは、藤原定家が校訂した、いわゆる青表紙本の系統とされていまして、特に重要視されてきました。

モニターに写本を映してみます。（スライド資料の**【資料2】**C）

これでは読みにくいので、レジュメの**【参考】**の欄に、活字本、岩波新大系のテクストを載せてあります。「（光源氏が朧月夜と思しき女君に歌を詠み掛けると、女君は）え忍ばぬなるべし、心いる方ならませば弓張りの月なき空にまよはましやは　と言ふ声、たゞ（朧月夜の）それなり。いとうれしきものから」。モニターのほうでも「いとうれしきものから」で終わっていることを確認して下さい。では、レジュメの**《訳》**を見ておきましょう。「光源氏からの歌に朧月夜も我慢できなかったのだろう、あなたが心に懸けてくれるなら弓張りのほぼ月のない空でも迷わないでしょうに。と詠む声は、まさに朧月夜その人のものである。光源氏はたいそう嬉しいけれど」。

一文が完結せずに、途中で何か言葉を飲み込んだような終わり方になっています。このような変な終わり方について、例えば、玉上琢彌氏は次のように解説しています。「嬉しさに飛び立つ思いながら、人目もあり、勝手知らぬ右大臣家、憚らねばならぬその思い、まさに万感の余情を長く引いて結んでいる」。もう大絶賛ですけれども。つまり、「朧月夜を見つけたのは嬉しいけれど、今後どのように関係を続けようか、光源氏があれこれ思案する様子が現れている」という理解ですね。確かに、お目当ての朧月夜を見つけて嬉しい、けれどここは慣れない敵方の屋敷だし、これからどうしようかな…という心理は、この後の、それでも朧月夜に通って、想定外に右大臣に見つかってしまうという展開からすると、ごく自然です。つまり、この大島本のテクストは、光源氏がこの後も朧月夜に通おうとするがゆえの、言い換えるならば、朧月夜に熱するがゆえの表現だと理解されてきたわけです。

ところが大澤本はこの部分、少し違います。**【資料2】**Dにお移り下さい。和歌の後ろから読みます。「…といふこゑ、たゞそれなり。いとうれしき物から、かろ〳〵しとてやみにけるとや」。写本も映しますのでモニターもご確認下さい。（スライド資料の**【資料2】**D）

最後の所、校訂者が、他の本と見比べて、ミセケチにして消した跡がありますが、もともと書写段階では「かろ〳〵しとてやみにけるとや」とあったことが分かります。

これは大澤本にしかない独自の異文です。レジュメのほうで**《訳》**を確認しておきましょう。「…光源氏はたいそう嬉しいけれど、一方で返歌の声を男に聞かせて軽々しいと思ってその後交際を絶ってしまったとか」。

つまり、光源氏は、返歌をした朧月夜に、嬉しいとは思うものの、男に声を聞かせるような軽々しい女だと見限り、

これ以降通わなくなった、というのです。自分が返事を求めたくせに「どっちやねん」という感じですけれど…。まあ、しかし、Cの大島本との違いは明らかです。片や、朧月夜に熱する人物、片や、冷める人物。先ほどの狭衣のごとく、光源氏の人物像も対照的です。そうなると、大澤本だと、一旦見限ったはずの光源氏が、なぜかその後も朧月夜に通ったことになりますから、私たちは、その理由について、検証しなければならなくなります。

このように、テクストのズレによって人物像が激変すると、ストーリーも、そして私たちの読み方も大きく変わってくるわけです。ではそのような状況の中で、私たちはどのように源氏物語のテクストと向き合えば良いのか、ということになります。

これまでは、先ほど触れました藤原定家が校訂した、いわゆる青表紙本系統の本を重視してきました。大島本もこの系統ですが、いわば、定家という権威を優先して、それ以外の写本にはあまり注目してこなかったわけです。しかし、近年、そのような流れが変わりつつあります。前に名前を挙げました伊井春樹先生や、その後任の加藤洋介先生など、大阪大学のグループにより、青表紙本、中でも大島本は、決して絶対視するようなテクストではない。あくまで様々な写本の一つにすぎない。というように、相対化、つまり絶対化の反対ですね、相対化する動きが出て来まして、多くの研究者の追認もあって、学会の主流になっています。なぜ大島本が絶対化できないかについては、二年生以上は「文献学基礎論Ⅱ」で、一年生は「文学研究法基礎」の授業で詳しく説明しますが、まあ、その伝来も、書写者も、書き入れ注記も、かなり「いいかげん」なのです。何人もが書き足した痕跡もありますし、この本だけを特別視するには問題が多い、ということですね。そこで、とにかく、大島本に偏ることは止めて、全ての写本について、その異文をそのまま受け容れよう、という流れに変わりつつあるわけです。例えば、**【資料1】**で述べた、ダークな狭衣は、深川本狭衣物語の論理として理解しよう。**【資料2】**で述べた、冷めた光源氏は、大澤本源氏物語の論理として位置付けよう、ということです。異文だからといって無視するのではなく、そのままでどのような物語として読めるのか、いわば、それぞれ、違った個性の物語として積極的に評価しよう、というわけです。

では、このような考え方に基づきまして、今からある写本テクストについて、その個性を探ってみたいと思います。少し難しい内容も含んでいますが、出来る限り分かりやす

く説明しようと思います。

今から取り上げるのは、実は大島本です。先ほど大島本に偏ってはダメだと言ったばかりじゃないか、なのに、三条西家本でも池田本でも中山本でも保坂本でも陽明文庫本でもなく、なぜ大島本なのか、と言われそうですけれども…。大きな理由は二つあります。が、いずれも後ほど明らかにします。

ではレジュメ二枚目上段の3ページ、**【資料3】**Eと、その横、Fの下の図を併せて御覧下さい。光源氏亡き後の世界、宇治十帖なのですが、光源氏の息子として育った薫が、今上帝と明石中宮の長女、女一宮を垣間見、覗き見ですね、をする場面です。明石中宮は光源氏の娘ですので、光源氏の建てた豪邸、六条院が実家です。薫は、普段は別の所に住んでいるのですが、何と言っても明石中宮は姉に当たりますので、簡単に六条院の奥まで入れるわけです。それを良いことに、薫が女一宮を覗いていると、六条院の女房「おもと」がそれに気付いて、薫に近づいてくる。薫は正体がバレないように隠れる。取り逃がした「おもと」は、一体誰がこんな奥深いところまで、つまり、帝と中宮の娘がいるような守られた空間ですよね、誰がそんなところまでやってきたのか、と思いを巡らせる、という内容です。Eを、後ろから三行目の「このおもとは」から読んでおきましょう。「…このおもとは、いみじきわざかな、御き丁をさへあらはに引きなしてけるよ、**右の大殿**の君たちならん、疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず…」。**《訳》**も後ろから四行目、「このおもとは」以降を見ますが、「大殿」というのは大臣のことです。また「右大臣」とありますが、ここはイコール左大臣夕霧と捉えます。理由はすぐ説明します。「このおもとは、大変なことだなあ、障子だけでなく御几帳まで奥が露わに見えるように置いてあったことよ、覗いていたのは**右大臣**（＝左大臣夕霧）の子息達であろうか、明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここ（＝六条院の女君や女房たちの控室）まで進入することは出来ないだろうし…」。つまり、この時「おもと」がイメージした侵入者は「夕霧の子息達」ということになります。夕霧は、明石中宮の兄で、しかも、この時六条院の管理者でもあります。その子どもたちが六条院にやってきても特段不自然ではない。そのように「おもと」が判断したということなのですが、実はこの部分、問題が二つあります。

まず一つ目。実は、ここを「夕霧の子息達」と読むためには、本来、「左の大殿の君たち」とあるべきなのですが、**【参考】**の欄のとおり、夕霧の官職は、大島本を含め、多くの写本でごちゃごちゃに乱れています。ここより前の竹

河巻で夕霧は左大臣になるのですが、なぜか後の巻で右大臣に戻っていたりします。これは、私もよく分からないのですが、もともと紫式部が源氏物語の全てを書いたわけではない、という、既に鎌倉期には広まっていたらしい伝承と関わっていると思われます。つまり、竹河巻の作者が紫式部とは別人だと考える書写者や校訂者は、当然、夕霧の昇進記事を信じませんから、右大臣と書き続けるわけです。で、何度も書写が繰り返されていくうちに、書写者や校訂者の考え方によって「右」になったり「左」になったりして、結果「ごちゃごちゃ」になっていく、と。

しかし、今は、竹河巻も同一作者と考えるのが一般的です。だとすると、『公卿補任』という任官記録を見る限り、平安時代に左大臣が右大臣に降格する例はありませんから、本来、竹河巻以降の夕霧は、左大臣で統一されるべきだということになります。現に、当の大島本も、おそらく迷いつつ、やっぱり「右」であるはずがないと考えたのでしょうね、**【参考】**の最後の行の点線部ですが、Eの直後、同じ蜻蛉巻三〇三ページで「左」に戻っています。しかも、ここは写本ではひらがなで「ひたり」となっています。三一〇ページも、これが夕霧の官職の最後の記事なのですが、これも「左」です。いずれも、写本に修正した痕跡はありません。ですので、大島本は、本来夕霧は左大臣のはずだと捉えているテクストだと見て良いと思います。ということで、「異文のままで」と言ったばかりですが、ここについては、「左大臣夕霧」だと理解することにします。

さて、二つ目の問題です。実は、これが本当の問題なのですが、この部分、大島本の写本では、どうももっと複雑なようなのです。**【資料3】**Fを御覧下さい。この部分、もともと「左右の大殿の君たち」とあったのを、「左右」をミセケチで消して、「右」と書き入れてあるのです。モニターにも映しておきます。（スライド資料の**【資料3】**F）

ということは、大島本の校訂者が、他の写本と見比べて「あれっ」と思ったのでしょうね、ここを「右」と直したのだと思いますが、それにせよ、もともとの大島本は、ここを「左右の大殿の君たち」としていたことになります。実はこのことは、なぜかあまり注目されていません。おそらく、書写者の書きミスだ、あるいは右か左か迷った挙げ句、両方書いてしまって、誰かが後から「右」と校訂したのだ、とあっさり理解されたのだと思います。しかし、よく考えて下さい。左を右と書きミスする、右を左と書きミスする、それは分かります。しかし、左を、あるいは右を、「左右」と書きミスするでしょうか。あるいは、どちらか迷ったという場合でも、普通、ええいとどちらか一方に決めるわけです。百歩譲って、書写者が、迷ったから取り敢えず

両方書いてみた、ということだったとしても、最後、「右」なり「左」なり、どちらかを消しませんか。そのまま残さないですよね。現に、ここ以外はどちらかしか書いていないわけですから。しかも、モニター画面では分かりにくいのですが、実は下の「右」の字だけに、一度、朱で消された痕跡があるのです。朱で消されているということは、「左右」と書いた書写者とは別の校訂者Xが、後から一旦「左」と校訂したということです。更にその上に、また別の校訂者Yが、今のように墨でミセケチにして「右」にしたということですね。物語が、校訂者の理解によって書き換えられていくものであることが窺えますが、ともかく、書写者は、確かに「左右の大殿」と書き残していた。大島本は、もともとはここを「左右両大臣」と把握していた、ということです。ちなみに、現存の写本では、大島本のみです。大島本の個性的本文、ということですね。

では私たちはここから何を読み取るべきなのでしょうか。この場面前後の政治状況について、少し整理してから考えてみましょう。**【資料4】**にお移り下さい。

①は先ほど少し触れた、夕霧が左大臣になる竹河巻の叙述です。読んでおきます。「左大臣(ひだりのおとど)亡せ給て、右は左に、藤大納言、左大将かけ給へる右大臣(みぎのおとど)になり給」。当時の左大臣が亡くなって、空いた左大臣ポストに、右大臣だった夕霧が上がり、夕霧がいた右大臣ポストに「藤大納言」が昇進した、と。「藤大納言」というのは、柏木の弟で、紅梅と呼ばれる人です。つまり、空きポストを玉突き状に埋める形で、左大臣夕霧、右大臣紅梅、という政治体制が成立したわけです。先ほど触れたとおり、この記事を信用しない立場もあったわけですが、私たちは信用する前提で進めていきます。

この時、夕霧は四十歳なのですが、注意したいのは、遡ること二十二年、夕霧十八歳の時の官職です。②を御覧下さい。夕霧の官職は、波線部、「中納言」とあります。この時、紅梅は、太傍線部、「弁の少将」となっています。「弁の少将」というのは、本官を近衛少将としつつ、同時に弁官を兼務しているということです。弁官というのは、各省庁の庶務や監視を行う重要職で、出世コースです。

さて、ここで問題にしたいのは、夕霧と紅梅の十八歳と四十歳の本官の位階、ランクの差なのです。**【参考】**の欄を御覧下さい。表の中に①②というマークが入っていますが、今見た本文の①②と対応しておりまして、①が四十歳の位階、で、②が十八歳の位階、というふうに見て下さい。つまり、ふたりとも②から①まで、二十二年間かけて昇進したということなのですが…。

いかがでしょう。一目瞭然だと思います。位階の欄に網掛けをしてありますが、夕霧は「従三位」、「じゅさんみ」と読みますけれど、そこから「二位」まで2ランクアップです。それに対して、紅梅は「正五位下」、「しょうごいげ」から「二位」まで、なんと8ランクアップです。もちろん、上位ほど定員が少ないので、一つの官職に長い間留まる傾向にあります。しかし、それを差し引いても、明らかに夕霧は紅梅より昇進が遅い。というより、紅梅が、着実に夕霧との差を詰めてきた、ということだと思います。

更に注意すべき点があります。レジュメ下段4ページの③**【系図ア】**を御覧下さい。宇治十帖の当初の系図です。夕霧を起点に見てみます。まず、夕霧は、長女大君を今上帝と明石中宮の東宮、つまり次期天皇ですね、この人と結婚させています。そして、次女中君を二宮と、この人は次期東宮候補なのですが、この人と結婚させています。更に同じく六の君を匂宮、この人も後から東宮候補になりますが、この人と結婚させます。本当は、この六の君の結婚は、物語上は、もう少し後のことなのですが、夕霧の権力体制が分かりやすいので、ここで一緒に挙げておきました。

今「夕霧の権力体制」と言いましたが、もう明らかですよね。帝と婚姻関係を利用して政権を握る、いわゆる外戚政治が狙いなのは明らかです。藤原道長も真っ青なぐらい、がちがちにコネクションを固めていまして、まあ、これで未来は安泰なわけです。普通は…、ですね。

ところが、事はそう簡単にはいきません。④にお移り下さい。読みます。「春宮には、右大臣殿（＝夕霧の大君）の並ぶ人なげにてさぶらひ給へば、きしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕へに思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と（紅梅大納言は）おぼし立ちて、（大君を東宮に）まいらせたてまつり給ふ。（紅梅の大君は）十七八のほどにて、うつくしうにほひ多かるかたちし給へり」。**《訳》**も見ておきましょう。「東宮には、右大臣夕霧殿の大君が並ぶ人もいない様子でお仕えしておられるので、競り合いづらいけれど、そのようにばかり言っていられようかそうもいかない、人より勝るようにと思う女子なのに宮仕えを断念しては、何の本意があろうか不本意であろう、と紅梅大納言は思い立ちなさって、大君を東宮に入内させなさる。紅梅の大君は十七八の年齢で、かわいらしくとても美しいご容貌をしておられる」。

要するに、大納言時代の紅梅も、夕霧同様、コネクション作戦を仕掛けてきた、ということです。すると、先ほど見た③の**【系図ア】**は、⑤の**【系図イ】**のように変貌します。

☆マークを付けておきましたが、紅梅がむりやり割り込

んできた感じですね。こうなると、夕霧の未来は「安泰」どころか、途端にピンチになります。紅梅の大君のほうが、夕霧の大君より、早く東宮の皇子を生むかもしれません。そうすると、その皇子が、将来東宮になり、帝になる可能性も出て来ます。つまり、場合によっては、夕霧ではなく、紅梅が、帝の外戚として政権を握る未来があり得る、ということです。夕霧は、紅梅に真っ向から敵対されて、追い込まれているのです。

このような文脈、このような政治状況であることを押さえた上で、「左右の大殿」に戻りましょう。

【資料5】にお移り下さい。先ほど、**【資料3】**で、もともとの大島本は「左右の大殿」だと述べましたので、それを反映させて書き直しました。読みます。「このおもとは、いみじきわざかな、御き丁をさへあらはに引きなしてけるよ、**左右の大殿**の君たちならん、疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず…」。先ほど、竹河巻以降は夕霧が左大臣で、紅梅が右大臣だと述べました。すると、この部分の解釈は次のようになるはずです。**《訳》**を御覧下さい。「このおもとは、大変なことだなあ、障子だけでなく御几帳まで奥が露わに見えるように置いてあったことよ、覗いていたのは**左大臣夕霧殿や右大臣紅梅殿**の子息達であろうか、明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここまで侵入することは出来ないだろう…」。

「おもと」が想定した侵入者が、「夕霧や紅梅の子息達」、と変わってくるところが重要です。なぜか。「おもと」がそのように考えた根拠に注意して下さい。傍線を付してあります。「疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず」。「明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここまで侵入することは出来ないだろう…」。

そうなのです。「おもと」は、夕霧と同じく、紅梅も、「明石中宮と関係が疎遠」ではない、と判定しているのです。思い出して下さい。先ほど述べたとおり、夕霧や子どもたちが簡単に六条院に出入りできるのは当然です。夕霧は明石中宮の兄弟ですし、六条院の管理者です。問題は、紅梅です。「おもと」は、この時、兄弟でも何でもない紅梅の子ども達についても、六条院の、奥の奥まで侵入しても不自然でない、と見ている。つまり、夕霧の子ども達に匹敵するほど、既に権力の中枢、明石中宮と関係が深くなっている、と認識しているのです。すなわち、女房クラスの人々の目にも、左大臣方と右大臣方とが、権力争いにおいて拮抗している事は、もはや明白な状態だったということです。

だとすると、大島本のみにある「左右の大殿」という叙述は、例えば、「左の大殿」と書かれていた場合、あるいは「右

の大殿」と書かれていた場合よりも、はるかに、この時の権力争いの熾烈さを如実に伝えると言えないでしょうか。**【資料4】**で述べたとおり、宇治十帖の夕霧は、決して「安泰」ではありません。むしろ、紅梅に追い上げられてピンチでした。つまり、「左右の大殿」というテクストは、左大臣夕霧を取り巻く、そのような厳しい政局をビビッドに伝えているのです。

この意味において、大島本は、当時の政局を、最も正確に反映しようとしたテクストである、と言うことが出来ます。夕霧の官職を「左大臣」と見ている点も含め、少なくともこれらの事例のぶん、大島本は、他の写本よりも、源氏物語の政治的動向に忠実なテクストだと考えられるのです。

ただ一点、そのように言うためにも、もう一つ確認しておかなければなりません。それは、人物呼称、作中人物の呼び方の問題です。つまり、二人の大臣をひっくるめた呼び方、「ひだりみぎのおおとの」という呼び方が、果たして当時あり得るのか、物語の表現として不自然ではないのか、という問題です。そもそも政界ナンバーワン、ナンバーツーをひとまとめに呼ぶのは、いかにも無礼な気もします。

例えば、**【資料3】**で見たとおり、「右の大殿（みぎのおおとの）」という呼び方は存在します。当然「左の大殿（ひだりのおおとの）」という呼び方もあります。また、**【資料4】**の①と、下段④のとおり、「さだいじん」あるいは「ひだりのおとど」、「うだいじん」あるいは「みぎのおとど」、これもあります。問題は、左と右をひとまとめにする例があるのかどうか…。そこで、源氏物語全篇から探してみました。

ここからは、**【資料6】**…＋αということで、モニターを御覧下さい。（スライド資料の**【資料6】大島本若菜上巻**）

二例とも大島本の若菜上巻です。光源氏の強大な権力が崩壊を始める重要な巻ですが…。最初の例は「ひだりみぎのおとど」と訓読みするか、「さうのだいじん」あるいは「さゆうのだいじん」と音読みで揃えるか、ですね。また、次の例は「左右おとど」とあります。読むときは「ひだりみぎの」と「の」を入れて訓読みで読めば良いと思います。

つまり、ひとまとめにして、「ひだりみぎの」、あるいは「さうの」、「さゆうの」と呼ぶことはあり得る、ということですね。では、後は、続けて「おおとの」と呼んでくれている事例があれば…ということですが…。

実は、源氏物語ではないのですが、ありました。うつほ物語です。モニターには、岩波の『旧大系』や小学館の『新

全集』の校訂に使われた九州大学蔵本を映しますので御覧下さい。（スライド資料の**【資料6】うつほ物語九州大学蔵本**）

国譲下巻といいまして、「源（みなもと）」と「藤原」の権力争いの巻です。あまりの生々しさに清少納言が枕草子で「国譲はにくし」と批判しています。この時の左大臣は源正頼、右大臣は藤原兼雅ですが、スライドが少し見にくいですが、ふたりまとめて「左右のおおとの」と呼ばれております。

ということで、源氏物語ではありませんでしたが、それより古いうつほ物語にちゃんと事例があったことは重視して良いと思います。もちろん、書写者も書写年代も違いますので、一方にあったからもう一方にもあるとは簡単には言えないのですが、ひとまず物語テクストの表記上、「左右の大殿」というのは決して不自然ではないということを確認して、私のここまでの考えを補強しておきたいと思います。

そろそろ、先ほどの答が出せそうです。先ほど私は、近年相対化が言われる大島本について、なぜ注目するのか、二つ理由があると言いました。大島本に偏ることなく、様々な写本の個性を評価しよう、という流れの中で、なぜ改めて大島本に注目したのか、ということですね。私は、決してこの流れに逆らおうとしているわけではありません。

そうではなく、むしろ大島本を相対化して、他の写本と比較したからこそ、「政治性に忠実であろうとする」大島本の個性が見えてくるのです。もちろん、活字のテクストには、例えば「左右の大殿」は、校訂されてしまって表には見えませんけれども、写本のテクストを確認した今、私たちは、本来そうあろうとした大島本のスタンスと言いましょうか、スピリットと言いましょうか、大島本はそういうテクストだと理解した上で向き合うことが出来ます。確かに、述べたとおり、大島本には「いいかげん」な面もあります。だからこそ、相対化されるわけですが、しかし、その「政治性」という個性は、他の写本に負けない魅力であり、敢えて大島本で読む意義を担保するものだと思います。

このことは私にとってものすごく重要なことです。覚えて下さっているでしょうか、私は、本講演のはじめに、今は物語内部の政治力学や権力構造について考えている、と言いました。政治力学や権力構造について考え、論じるのですから、それならば、それに最も相応しいのは「政治性に忠実であろうとする」テクスト、つまり大島本なのではないでしょうか。大島本の個性は、今の私の目的に最も合致している。これが一つ目の答です。

次に二つ目の答です。これは、むしろ教育学的観点です。

確かに、多様なテクストを認めれば、当然、新たな発見はあると思います。しかし、特定のテクストに絞って議論をした方が、研究が深まることも、また事実です。ある人はテクストXで論じ、別の人はテクストYで論じたならば、果たして有効な議論となるのか。テクストXでしか通用しない論理やテクストYでしか言えない結論にならないか、という不安ですね。議論の拡散のおそれがあります。中学校や高校の現場も混乱するはずです。採択した教科書によって、同じ物語の同じ場面で、教える内容が変わってくるのです。入試問題も、果たして平等な問題が作れるのか、不安です。

あるいは、そもそも、研究者以外の人々が、さまざまな写本テクストを入手できるのか、という問題もあります。これは一般の人にとっては、心理的にも経済的にも、かなりハードルが高いはずで、かえって読者を遠ざけてしまいかねません。影印本で出版されているものも限られていますし、新たな底本（そこほん）を使って編集した活字本が出るというのも、昨今の出版事情を考えるとかなり難しいはずです。だとすると、古典を読む人の裾野を狭めない意味でも、少なくとも今ある活字本と同じくらい、様々な写本を底本としたテクストが市場に増えない限り、当面は既に流布している大島本が効率的だ、というわけです。

実は、伊井春樹先生も、いくつかの御論の中で、私が今述べたような問題点について触れておられるのですが、どうもこちらの方はあまり取り上げられないようです。しかし、少なくとも私たちは、そのことをしっかり理解しておくべきだと思います。

つまり、特定のテクストでこそ深まる議論もあるということ、多くの写本が乱立することで、逆に読者の裾野を狭めてしまう危険性もあること。これが二つ目の答です。

では、そろそろ本講演の結論に入りましょう。私はここまで平安物語のテクストについて、説明を進めてきましたが、事は、決して平安文学に限ったことではありません。

はじめに触れましたが、古典においては、写本相互のテクストのズレは当たり前です。特に物語においては、校訂者の理解によって書き換えられながら享受されてきました。また、近現代の作品においても手直し前後の作品がいずれも流通していたり、作家自身が敢えてバージョン違いという形で複数のテクストを並行させたりすることもあります。更に、一見同じ作品でも、別々の出版社から出されて、字体や句読点、漢字や送り仮名、ルビなどが微妙に違うこともあります。もっというと、同じ出版社でも、第何版かによってそれらが変わってくることもあります。デー

タベースやアンケートなら、母集団ごとに全く別の、今日の言葉で言うと「テクスト」になっているはずです。

だとすると、皆さんがまず最初にやらなければならないのは、今皆さんの目の前にあるテクストが、一体どういうテクストなのか、どういう個性を持っているのか、複数のテクストを見比べながら、しっかり見極めることではないでしょうか。なぜなら、テクストの個性にフィットしない事を論じるより、フィットすることを論じるほうが、読み手や聞き手に訴えかける力、すなわち「訴求力」を高めやすいからです。

例えば、光源氏が実は情熱的ではない、とか、狭衣が実はダークな策略家だ、とか、そういった人物像の多面性と言いますか多角的表現と言いますか、そういう現象から何かを論じたいときは、大澤本なり、深川本なりのテクストの方が、説明もしやすいし、「訴求力」も上がる。結果、読み手や聞き手にも分かりやすい、というわけです。つまり、テクストの個性を知ることで、自分の主張したいことに応じて、それを、より際立たせてくれるテクストで論じる、ということが出来るようになるのです。

ただし、やり過ぎは禁物です。先ほど述べましたとおり、共通のテクストだからこそ深まる議論というものもありますので、臨機応変にうまく使い分けることが大切だと思います。要は、バランスということです。

では、いよいよ最後になりました。私の最初の問を思い出して下さい。私の問は、「皆さんは、なぜ、そのテクストを使っているのですか?」というものでした。一、二年生の皆さんは、今から様々な作品の様々なテクストを読み比べて、じっくりその答を探せば良いと思います。三、四年生や大学院生、研究生の皆さんは、あんまりじっくり探している余裕はありませんので、少々焦ってください。

テクストの個性と向き合うことで、必ず、新たな何かが見えてきます。皆さんが、皆さんの味方となってくれるテクストと出会って、おもしろい研究をしてくれることを期待しています。

時間は、私のストップウォッチで、今ちょうど六十分です。以上で私の講演を終わります。ご静聴ありがとうございました。

「左右の」大臣考
―テクストとの向き合い方―

日本語日本文学科　中井　賢一

【資料１／『狭衣物語』天稚御子降下事件】

A　春夏秋冬四冊本　（引用本文と頁数は、新潮『集成』による）

（…狭衣の笛の音に感応した天稚御子が降下する。）

かうめでたき（天稚御子の）御有様のひき離れたうて、（狭衣は）笛を吹く吹くさそはれぬべき気色なるに、帝の御心騒がせたまひて、（―中略―）いとゆゆしき御気色にてひきとどめさせたまふを、（狭衣は）かなしく見たてまつりたまふにも、まいて大臣（＝父関白）、母宮など聞きたまはむことをおぼし出づるに、厭はしくおぼさるるこの世なれど、ふり捨てがたきにや、かかる御迎へのかたじけなさにひとへに思ひたてて、帝の袖をひかへて惜しみがなしみたまふ。親たちのかつ見るをだに鎧がすうしろめたうおぼしたるを、行方なく聞きなしたまひて、むなしき空を形見とながめたまはむさまのかなしさに、このたびの御供に参るまじきよしを、言ひ知らずかなしくおもしろく文つくりて、笛を持ちながらすこし涙ぐみたまへる…（三一～三三頁）

《訳》これほど素晴らしい天稚御子のご様子が離れがたくて、狭衣は笛を吹きつつ天上界へ誘われていってしまいそうな様子なので、帝のお心は悪い胸騒ぎがなさって、（―中略―）たいそう深刻なご様子で引き留めなさるので、狭衣はそれをいとおしく見申し上げなさるにつけても、まして父関白や母宮などがお聞きになった場合を思い浮かべると、厭わしく思われるこの世だけれど、振り捨て難いものであるのか、このような天稚御子のお迎えのもったいなさにただただお供したいと思い立ったが、帝が袖を押さえて惜しみ悲しみなさるご様子、親たちが少し私と顔を合わせる片時さえ鎧きることなく気掛かりと思っておられるのに、私が行方知れずになったとお聞きになり、何もない空を私の形見として物思いなさるであろうご様子がかなしいので、今回のお供には参上できない旨を言いようもなく良い出来ばえの漢詩を作って、笛を持ちつつ少し涙ぐみなさっている…

（《訳》は私に付した。以下同様）

B　深川本　（引用本文と頁数は、小学館『新全集』による）

（…狭衣の笛の音に感応した天稚御子が降下する。）

この天稚御子に引き立てられて（狭衣が）立ちなんとするを、帝、東宮も、何しに、かかることをさせつらん、と悔しうて、笛をば取らで、手をとらへさせたまひて、いみじう泣かせたまへば、この御子（＝天稚御子）もいと心苦しう思しわびらひたるけしきにて、（―中略―）かく十善の君（＝帝）の泣く泣く惜しみ悲しみたまへば、（天稚御子は）えひたすらに今宵率て昇らずなりぬるよし、おもしろうめでたう文に作りたまひて、声は聞き知らずおもしろうて誦じたまへるに、中将（＝狭衣）うち泣きて、心より外に口惜しう、かかる絆どもにひかへられたてまつりて、今宵御共に参らずなりぬるよしを、えも言はず空をうち眺めて誦じたまへる…（四四～四五頁）

《訳》この天稚御子に促されて狭衣は昇天しようとするので、帝、東宮とも、どうして笛を強要してしまったのかと悔しくて、笛を受け取らずに、狭衣の手を捉えなさって、たいそう泣きなさるので、この天稚御子もたいそう心苦しく思い悩んでいる様子で、（―中略―）帝が泣く泣く狭衣との別れを惜しみ悲しみなさるので、天稚御子は無理に今宵狭衣を連れて昇天することは出来なくなった旨、趣深く素晴らしい漢詩にお作りになって、声は聞いたことのないほど素晴らしく吟じなさったので、狭衣中将も涙をこぼして、心外で悔しく、このような帝達との絆しなどに引き留められ申し上げて、今宵天稚御子と共に天上に参上できなくなった旨の漢詩を、言いようのない素晴らしさで空をぼんやりと見やりつつ吟じなさっている…

【資料２／『源氏物語』朧月夜事件】

C　大島本　花宴巻末（写本）　（他諸本も同様）　（句読点は私に付した）

（光源氏が朧月夜と思しき女君に歌を詠み掛けると、女君は）えしのばぬなるべし、
心いるかたならませばゆみはりの月なき空にまよはましやは
といふこゑたゞそれなり。いとうれしきものから。

［参考］岩波『新大系』の本文

（光源氏が朧月夜と思しき女君に歌を詠み掛けると、女君は）え忍ばぬなるべし、
心いる方ならませば弓張りの月なき空にまよはましやは
と言ふ声、たゞ（朧月夜の）それなり。いとうれしきものから。（二八四頁）

《訳》光源氏からの歌に朧月夜も我慢できなかったのだろう、
あなたが心に懸けてくれるなら弓張りのほぼ月のない空でも迷わないでしょうに
と詠む声は、まさに朧月夜その人のものである。光源氏はたいそう嬉しいけれど…。

D　大澤本　花宴巻末（写本）　（句読点は私に付した）

（光源氏が朧月夜と思しき女君に歌を詠み掛けると、女君は）えしのばぬなるべし、
こゝろいる方ならませばゆみはりの月なき空にまよはましやは
といふこゑ、たゞ（朧月夜の）それなり。いとうれしき物から、かわ〜しきやみ
比けるとや。

《訳》…光源氏はたいそう嬉しいけれど、一方で返歌の声を男に聞かせて軽々しいと思ってその後交際を絶ってしまったとか。

本講演のキーワード
- テクスト
- 写本
- 異文
- 相対化（と絶対化）
- 個性
- 訴求力

【資料３／『源氏物語』女一宮垣間見事件】

E　大島本　蜻蛉巻（岩波『新大系』本）

（薫は障子の隙間から女一宮を垣間見する。）この（薫の）なをし姿を見つくるに、（女房の「おもと」は）誰ならんと心さはぎて、をのがさま見えんことも知らず、簀子よりたゞ来に来れば、（薫は）ふと立ち去りて、誰とも見えじ、すきゞしきやうなりと思ひて隠れ給ひぬ。このおもとは、いみじきわざかな、御き丁をさへあらはに引きなしてけるよ、**右の大殿**の君たちならん、疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず…（三〇〇頁）

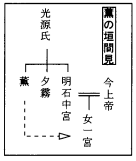
［参考］**夕霧の官位**

・竹河巻「左」→椎本巻「右」→宿木巻「右」→東屋巻「右」→総角巻→「左」→蜻蛉巻（三〇〇頁）「右」→蜻蛉巻（三〇三頁）「左」→蜻蛉巻（三一〇頁）「左」

《訳》垣間見をしている薫の直衣姿を見つけて、おもとは誰だろうかと胸がどきどきして、自分の姿が人に見えていることも気付かず、簀子を通って一直線におもとがこちらに来るので、薫は障子の傍からすっと立ち退いて、誰だとも分からないようにしよう、好色めいているからと思って隠れなさった。このおもとは、大変なことだなあ、障子だけでなく御几帳まで奥が露わに見えるように置いてあったことよ、覗いていたのは右大臣（＝左大臣夕霧）の子息達であろうか、明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここ（＝六条院の女君や女房たちの控室）まで侵入することは出来ないだろうし…

F　大島本　蜻蛉巻（写本）

…
いみしきわさかなみき丁をさへあらはに
右
ひきなしてけるよ生右の大殿の君たち
ならん…



【資料４／夕霧と紅梅】

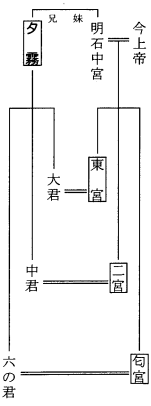
①　**左大臣**に仕せ給て、右（＝夕霧）は左に、藤大納言（＝紅梅）、左大将かけ給へる右大臣になり給。（『新大系』竹河巻　二八八頁）　**※夕霧＝四〇歳**

②　（冷泉帝の）御かたちいよ〳〵ねびとゝのほり給て、（光源氏と）たゞ一つ物と見えさせ給を、中納言（＝夕霧）さぶらひ給が、こと〳〵ならぬこそめざましけれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしにをとりまさらん、あざやかにこほはしき所は添ひてさへ見ゆ。ふへ仕うまつり給、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、弁の少将（＝紅梅）の声すぐれたり。（藤裏葉巻　一九八頁）　**※夕霧＝一八歳**

［参考］**位階と官職**

	位階	官職例	
	従三位	正三位	従三位
夕霧	①	左大臣	大納言
	②		中納言
			正四位上
			正四位下
			参議
			従四位上
			正四位下
紅梅	①	右大臣	左大弁
			近衛中将
			正五位上
			正五位下
	②		近衛少将

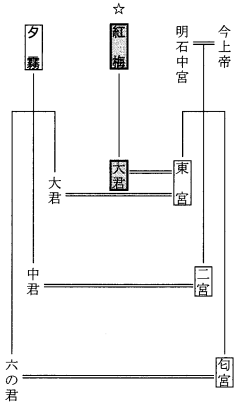
③【系図ア】



④　春宮には、**右大臣**殿（＝夕霧の大君）の並ぶ人なげにてさぶらひ給ば、きしろひにくけれど、さのみ言ひてやは、人にまさらむと思ふ女子を宮仕へに思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と（紅梅大納言は）おぼし立ちて、（大君を東宮に）まいらせたてまつり給ふ。（紅梅の大君は）十七八のほどにて、うつくしうにほひ多かるかたちし給へり。（『新大系』紅梅巻　二三三頁）

《訳》東宮には、右大臣夕霧殿の大君が並ぶ人もいない様子でお仕えしておられるので、競り合いづらいけれど、そのようにばかり言っていられようかそうもいかない、人より勝るようにと思う女子なのに宮仕えを断念しては、何の本意があろうか不本意であろう、と紅梅大納言は思い立ちなさって、大君を東宮に入内させなさる。紅梅の大君は十七八の年齢で、かわいらしくとても美しいご容貌をしておられる。

⑤【系図イ】



【資料５／Ｅ＋Ｆ】

…このおもとは、いみじきわざかな、御き丁をさへあらはに引きなしてけるよ、**左右の大殿**の君たちならん、疎き人、はたこゝまで来べきにもあらず…

《訳》…このおもとは、大変なことだなあ、障子だけでなく御几帳まで奥が露わに見えるようにと置いてあったことよ、覗いていたのは**左大臣夕霧殿**や**右大臣紅梅殿**の子息達であろうか、明石中宮と関係が疎遠な人では、とてもここ（＝六条院の女君や女房たちの控室）まで侵入することは出来ないだろうし…

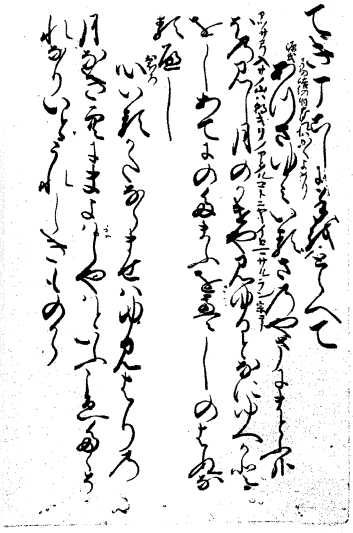
【資料６／…＋α】

平成２７年度　熊本県立大学　日本語日本文学会

「左右の」大臣考
―テクストとの向き合い方―

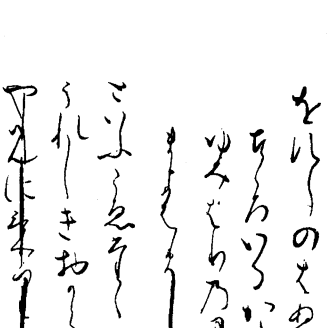
文学部　日本語日本文学科　　中井　賢一

【資料２】Ｃ　大島本　花宴巻末



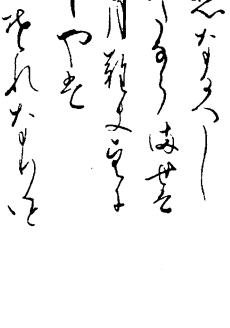
……えしのはぬな
るへし
心いる　かたならませは　ゆ　み　はりの
（ま）
月　なき　空に　まよは・しやはといふこゑたゝそ
れなり　いと　うれしき　ものから

【資料2】D　大澤（おおさわ）本　花宴巻末



…えしのは　ぬなるへし
こゝろいるかたならませは
ゆみはりの　月　なき　空に
まよはまし　やは　それ　なりいと
といふこゝたゝ
うれしき物から　かろくしとて
やみに　け　る　と　や

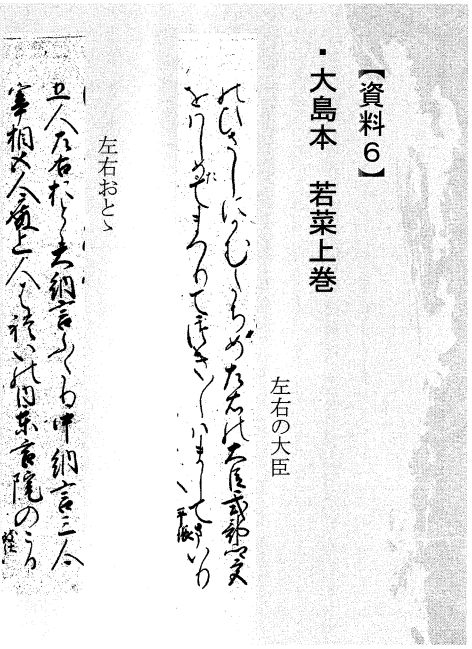
【資料3】F　大島本　蜻蛉巻



……おもとは
いみし　き　わさかな　みき　丁を　さへ　あらはに
ひき　な　し　て　けるよ　左右の大殿（右）の君　たち
ならんうとき人はた　こゝ　まて　くへき　にも　あ
らす……

【資料６】

・大島本　若菜上巻



左右の大臣

左右おとゝ

・うつほ物語　九州大学蔵本

のおほとの

（２行目末より）　左右